

田舎暮らしに最適なのはどこ？「住みたい田舎」ランキング

株式会社宝島社が発行する田舎暮らしのための月刊誌『田舎暮らしの本』では、現在発売中の最新号「2015年版住みたい田舎ベストランキング」を発表している。この「住みたい田舎ランキング」は、定住促進に積極的な2,957市町村を対象に、10ジャンル全95項目のアンケートを実施し、“田舎暮らしに最適な自治体”をランキングしたもの。アンケート項目は、田舎暮らしの実現に重要なポイントとなる「自然環境」「移住者支援制度の充実度」「子育てのしやすさ」「医療介護体制の充実度」などを設定している。

第3回を迎える今回のランキングでは、島根県大田市が総合1位となり、「移住者支援制度が充実」「就職・就農支援が手厚い」「子育てのしやすい環境」などの理由から選ばれた。次いで、鳥取県鳥取市が2位、大分県豊後高田市、鹿児島県薩摩川内市が同率3位、佐賀県武雄市が5位という結果になった。

総合ランキングの他に、読者ニーズに合わせ「子育て世代にぴったりの田舎」や「シニア世代が暮らしやすい田舎」「週末に通える田舎」など計7つの部門別ランキングも発表している。政府が地方創生を重点政策に掲げるなか、自治体も移住者支援制度に力を入れており、また、近年は若い世代の田舎暮らしも増えていることから、今後も田舎暮らしに注目が集まることが予想される。



■総合ランキング

- 第1位 大田市（島根県）
- 第2位 鳥取市（鳥取県）
- 第3位 豊後高田市（大分県）
- 第3位 薩摩川内市（鹿児島県）
- 第5位 武雄市（佐賀県）

■部門別ランキング

- ◆子育て世代にぴったりの田舎
 - 第1位 伊那市（長野県）
- ◆シニア世代が暮らしやすい田舎
 - 第1位 武雄市（佐賀県）
- ◆週末に通える田舎
 - 第1位 館山市（千葉県）

<http://tkj.jp/inaka/201502/#feature1>

<http://tkj.jp/read/index/magazine/inaka/month/201502/maxpage/24/pagedir/2/pn/4/>

FMさつませんだいで聞いた情報をもとに、早速、明屋書店で購入して読みましたが、第1位の大田市（島根県）、第2位の鳥取市（鳥取県）、本市と同ポイントで第3位の豊後高田市（大分県）までは、3～4誌面を割いて紹介されていましたが薩摩川内市は掲載無。

4 日常生活

- 1 買い物困難な土地への移動販売がある
- 2 役所・役場から車で30分圏内にコンビニやスーパーがある
- 3 役所・役場から車で1時間圏内に大型ショッピングモールがある
- 4 市町村内全域に高速インターネット網が整備されている
- 5 図書館がある
- 6 スポーツジムなど体力づくりに有用な施設がある
- 7 地域住民の利用料金が300円以下の温泉施設が2カ所以上ある
- 8 米どころである
- 9 果樹栽培が盛んである
- 10 畜産(肉牛、乳牛、ヒツジなど)が盛んである
- 11 地元で水揚げされた魚介類が安価で手に入る
- 12 日本酒、焼酎、ワイン、地ビール、ウイスキーなどの生産が盛んな酒どころである
- 13 総じて最低気温が5℃を下回ることがなく、年間を通じて菜園が可能である



5 交通の便利さ

- 1 政令指定都市まで1時間圏内(車や電車)
- 2 都道府県庁まで1時間圏内(車や電車)
- 3 高速のインターまで30分圏内
- 4 鉄道の駅がある
- 5 新幹線発着駅まで1時間圏内
- 6 空港まで1時間圏内(車や電車)
- 7 おおむね徒歩や自転車で移動しやすい平坦な地形
- 8 オンデマンドバスなど交通弱者向けの仕組みがある
- 9 冬季でもスタットレスタイヤは不要
- 10 道路の除雪は不要



6 老後の医療介護体制

- 1 車で30分圏内に救命救急センターがある
- 2 総合病院が市町村内にある
- 3 緊急時にヘリコプターなど救命救急センターに搬送する手段があり、実際に活用している
- 4 地域医療に熱心で、在宅医療や訪問看護に力を入れている医療機関がある
- 5 健康維持のための予防施設、フィットネス施設、プール、認知症予防教室などがある
- 6 特別養護老人ホームがある
- 7 住民が参加できる生活習慣病予防の栄養指導や講習がある
- 8 集団健診や特定検診の受診を促すために、受診票の送付や告知など以外に、積極的な働きかけを行っている
- 9 在宅介護を支援する仕組みや講習会がある
- 10 人口2000人当たり1人以上の保健師がいる



第3回 日本「住みたい田舎」 ベストランキング!

10ジャンル95項目で調査! アンケート 内容

編集部では(一社)移住・交流推進機構(JOIN)の協力のもと、全国の市町村に独自のアンケートを実施。田舎暮らし実現に重要なポイントとなる全95項目の質問を設け、各自治体に回答してもらった。

1 移住者歓迎度

- 1 首長が定住促進を公約にしている
- 2 JOINの自治体会員である
- 3 専任の移住支援担当者がいる
- 4 移住・定住に特化したWebサイトを運営している
- 5 登録者向けの情報誌(紙)、Facebook、ブログなどを利用して潜在的な移住者に向けて情報を発信している
- 6 「ふるさと回帰フェア2014」に参加した
- 7 2014年度に市町村外で移住相談会を開催した、または開催予定
- 8 2014年度に現地移住体験ツアーを開催した、または開催予定



2 都市住民との交流

- 1 「農林漁業体験民宿」(農林水産省)がある
- 2 棚田オーナー制度などのオーナー制度がある
- 3 ワークステイ、ワーキングホリデーを実施している
- 4 クラインガルデンがある
- 5 田舎暮らしお試し体験施設がある



3 移住者支援制度の充実度

- 1 空き家バンク制度がある
- 2 2014年1月1日から10月末日時点で、空き家バンクの成約件数(賃貸・売買合わせて)が5件以上ある
- 3 移住相談窓口と連携した民間不動産業者(団体)があり物件を紹介できる
- 4 定住促進住宅や移住者が利用できる公営住宅がある
- 5 移住前の相談や、移住後のフォローを行っている民間団体がある
- 6 移住者向けに住宅の新築補助をしている
- 7 移住者向けに住宅の購入補助をしている
- 8 移住者向けに住宅の改修補助をしている
- 9 無料職業紹介、求人情報の提供などで移住者の就職を支援している
- 10 市町村独自の、給付金を受けられる農林漁業の研修制度がある
- 11 起業・開業を支援する制度がある
- 12 「新・田舎で働き隊」を受け入れている
- 13 「地域おこし協力隊」を受け入れている
- 14 「緑のふるさと協力隊」を受け入れている



7 子育てのしやすさ

- 1 第3子以降の保育料が無料(第1子以降の無料、第2子以降の無料も該当)
- 2 中学生まで医療費無料(高校生まで無料も該当)
- 3 高校生までの通学費の補助がある
- 4 産科が市町村内にある
- 5 小児科が市町村内にある
- 6 子育てヘルパー派遣や悩み相談などで子育てを支援している
- 7 子育て世代向けの住宅の用意がある
- 8 子育て世代への家賃補助がある
- 9 出産祝い金がある
- 10 子どもがいる移住世帯を対象とした子育て給付金制度がある
- 11 親子山村留学を受け入れている学校がある



8 自然の豊かさ

- 1 「日本の百名山」級の名山がある
- 2 「名水百選」または「平成の名水百選」(環境省)に選ばれた湧水・河川・地下水がある
- 3 「森林浴の森100選」に選ばれた森がある
または「水源の森百選」(林野庁)に選ばれた森がある
- 4 「森の巨人たち百選」(林野庁)に選ばれた巨樹がある
- 5 「日本の滝百選」(環境省、林野庁)に選ばれた滝がある
- 6 「快水浴場百選」(環境省)に選ばれた水浴場がある
- 7 「ふるさといきものの里百選」(環境省)に選ばれた地域がある



9 災害リスク

- 1 台風・大雨の大きな被害はめったにない
- 2 洪水・土砂災害はめったにない
- 3 大雪の大きな被害はめったにない
- 4 地震に強い地盤である
- 5 津波リスクが低い
- 6 活火山がない
- 7 水不足に悩まされることはほとんどない



第 **1** 位 (総合 **3** 位)

鹿児島県 **薩摩川内市** **38** / 45点

気候温暖で天災の少ない土地
移住希望者向け支援制度も一通り揃う

鹿児島県内最大の面積に約9万8000人の人口を抱える薩摩川内市には、大型ショッピングセンター、温泉、新幹線の駅など一通りの都市機能が揃っている。もちろん気候は温暖で降雪は年に一度あるかないか。大きな自然災害が少ないのも魅力で、台風もさほど心配ない。住宅取得に関する助成金や、リフォーム費用の補助などのほか、いざというとき頼りになる鹿児島県運用ドクターヘリや、救命救急対応可能な総合病院などの医療面も充実しており、幅広い世代が暮らしやすい条件が揃っている。

企画政策課 ☎0996-22-8115



↑800年以上の歴史を誇る川内高城温泉郷は、九州でも有名な湯治場。

10 伝統的な景観・文化・風土の保全

- 1 「日本の棚田百選」(農林水産省)に選ばれた棚田がある
- 2 「疏水百選」(農林水産省、疏水百選の実施事務局)に選ばれた農業水路がある
- 3 「未来に残したい漁業漁村の歴史文化財産百選」(水産庁)に選ばれた文化財がある
- 4 「にほんの里100選」(森林文化協会)または「日本で最も美しい村連合」に選ばれている(加盟している)
- 5 「美しい日本のむら景観百選」(農林水産省)に選ばれた景観がある
- 6 「日本百名湯」(日本経済新聞社)に選ばれた温泉がある
- 7 保存・継承されている歴史ある祭りや伝統芸能がある
- 8 伝統工芸・伝統芸能の後継者を育成・支援している
- 9 国指定の重要無形文化財、重要無形民俗文化財がある(重要文化財、重要有形民俗文化財は除く)
- 10 伝統的建造物群保存地区(文化庁)がある



いしばしげる 1957年生まれ。慶應義塾大学法学部卒。三井銀行（現三井住友銀行）入行後、参議院議員だった父の死去に伴い、国政へ。昭和61年に当時の全国最年少議員として衆議院議員選挙に初当選以来、10期連続で当選。防衛大臣、農林水産大臣、自民党幹事長などを経て、9月より地方創生担当大臣に就任。趣味は料理、読書、遠泳など。



2014年11月に可決・成立した「まち・ひと・しごと創生法」は、地域振興にどのような影響を与えるのだろうか。9月に地方創生担当大臣に就任した石破茂さんに、法案の趣旨と政府の方針・理念、そして自身の田舎への思いについて伺った。

全国の自治体が策定する戦略を 国が支援する体制をつくります

地方創生担当大臣 石破 茂さん

公共工事と企業誘致に頼ることはできない

私は鳥取県八頭町の、旧都家町という、かなり気合の入った田舎出身です。育ったのは父の石破二郎が鳥取県知事だった関係で鳥取市の公邸でしたが、小学生から中学生にかけては、長い休みになると田舎暮らし。夏休みの前半は岩美町の浦富という海辺で過ごし、後半は山深い八頭の実家に泊まり込み、田舎暮らしを楽しみました。

当時はまだ田舎が元気な時代で、わが鳥取県でも珍しく人口が増えた時期でしたが、そのころの地方経済は公共工事と企業誘致で栄えていました。何万人が公共工事で雇用され、鳥取でいえば鳥取三洋電機（現・三洋テクノソリューションズ鳥取）やそれに連なる企業群があって、何万人という雇用があった。

けれども、現在は国の借金が1,000兆円という時代です。多くの人を公共事業で雇用することは望むべくもありません。企業はマザー工場はともかくとしても、大量生産を行う工場はマーケットがあるところにつくるわけで、日本よりアジア諸国が中心になるでしょ

う。

だから今後は、公共事業や企業立地に頼らない地方をつくっていかねばなりません。

地方創生は、私のライフワークです。

地方の挑戦を支援するワンストップ窓口をつくる

独自の取り組みで大きな成果を挙げている人たちが、地方にはたくさんいます。例えば鹿児島県鹿屋市の「やねだん」や、北海道音威子府村の高校の取り組み、島根県大田市の中根プレイスなど、そこにしかないものやそこにしかいない人がいるところには、全国から人が集まるんですよね。そういった成功事例集を読むと、下手な小説より面白い。俺の村はどうだ！すごいだろ！という自信と誇りがみなぎっていて、それが人を引き付けている。その地域が元気になっている。

政府の総合戦略や長期ビジョンに基づき、これからすべての都道府県・市町村に個別に戦略をつくっていただくこととなります。町や村にどこから人が来て、どこへ出ていくのか。モノやお金はどうなのか。そういった精密なデータを元に現状分析をし、5年後に達成すべき数値目標を平成27年度中に設定してもらいます。計画し（Plan）、実行し（Do）、どうだったか評価し（Check）、それを元に新たな行動を起こす（Act）というPDCAサイクルをつくりまします。

それを支援する体制を、国もつくらなければなりません。農林水産省へ行き、経済産業省へ行き、国土交通省へ行ってそれぞれ書類を出し、採択されるまでが大仕事といったことがないように、ワンストップの窓口をつくり、しっかり支援する仕組みを整えたいと思っています。

地方を守ることで日本全体が強くなる

日本はこれまで、食料やエネルギーの大半を外国に依存してきました。食料自給率を高めよう、エネルギー自給の体制を強化しよう、と言ってきたけれど、どこまで本気で取り組んだかといえば疑問です。

米で言えば、高い関税を守り、生産調整で価格を維持してきましたが、それで本当に産業たり得たのか。国土の67%が森林で、1年に生長する木の量だけで国内の木材需要が賄えるにもかかわらず、どうして山は荒れ放題になったのか。金を出して外国から買えばそれでいいと思っていた、それが国家を脆弱にしてきた。地方を守り、人間らしい暮らしをすることが、外的な要因に大きく左右されることのない日本をつくることにもつながるのではないかと思います。

田舎こそ、人間らしく暮らせるところ

私は高校から、大学、勤め先と東京で過ごしました。それなりに楽しかったこともありま

すが、新入社員のころは働くために休むような生活でした。朝6時半に寮を出て、8時には勤務先の銀行に入っている。夜は終電以外で帰ったことがない。土曜も出勤で、休みの日は死んだように寝ている。楽しかったですけど、ふと「何なんだろうね？」と思うときがありました。

生きる価値を何に置くか——。田舎にはよいところも悪いところもありますが、田舎では自然とともに生きることができ、人間らしい生活が送れることは間違いありません。周りの人との付き合いがいやだなあと思うかもしれませんが、隣の人が誰かもわからないマンションで、死んでもひと月発見されないということは、田舎ではあり得ません。

東京で暮らすことに価値を見出す人もいるでしょう。でも、田舎の価値観にふれる機会がもっとあってもいいし、それによって田舎っていいなと思う人がもっと沢山いていいと思うんです。

私の父は建設事務次官のときに都知事選出馬の話もあったのですが、お世話になった故郷の知事をやりたいということで、私が1歳のときに鳥取県知事になりました。祖父も村長でしたし、私にもそういった地元を愛する血が流れているのを感じます。

子どものころにあんなに賑やかで、ワクワクするところだった田舎が、今や耕作放棄地だらけで、駅前の多くの店がシャッターを下ろしている。これっていったい何なんだろう、なんとかしたい、という思いが強くありました。農林水産業についても長く勉強してきました。地方創生担当大臣をやってくださいと安倍総理から言われたとき、あまり迷わずお受けしたのは、地方創生は自分のライフワークだとの思いがあったからです。

※まち・ひと・しごと創生法

地方創生の理念や、戦略策定の方法について定めた法律。少子高齢化の進展に的確に対応し、人口の減少に歯止めをかけるとともに、東京圏への人口の過度の集中を是正することを狙いとされている。本法によって設置された「まち・ひと・しごと創生本部」が議論を行い、各地方自治体はその状況に合った戦略を決定し、実践していく。

※やねだん

鹿児島県鹿屋市串良町にある柳谷地区の愛称。行政に頼らないむらおこしで注目を集める。約120戸の集落だが、土着菌を活用した環境保全型農業や本格芋焼酎などで自主財源を確保し、独自の福祉や青少年教育にも取り組む。

※音威子府村の高校

北海道で最も人口が少ない自治体である、音威子府村立の北海道おといねっふ美術工芸高等学校のこと。存亡の危機から改革に取り組み、美術展などで多くの生徒が入選するなど、全国から入学志望者が集まる「奇跡の学校」として知られる。



↑「成功事例を、たまたまい指導者がいたからでしょ? と片付けてしまわずに、うちでもできないかな? とポジティブに考えることが重要だと思うんです」